

# Life Stories Project



2024

かすがい市民文化財団  
あなたの“小さな”物語

小さな物語からはじまる  
長いおはなし





サンと野々山さん



## 書いて読んで会って話す 聞いて書いて話して留める

「人生はいつも、ちょっとだけ間に合わない」とは、ある映画のキャッチコピーだ。今日はいつも道半ば。そこに小さな物語が無数にころがっている。それらはいつも現在進行形だから、書いても書いても事実とは異なるかもしれない。書いても伝わらない複雑な今の方が、魅惑的かもしれない。それでも、大きな歴史の中に存在する小さな物語を思わず書き留めてしまう。

一人ひとりに光をあてることで、時代が見えてくるからだ。大事なものは、これからのこと。書いて顧みることで、次を照らす。そこに生きた人たちは、互いに影響しあっている。その人しにできないことが、たくさんあるはずだから。

この冊子は、自分史作品集  
「あなたの“小さな”物語 vol.21」  
からはじまるお話を、  
収録したものです。

### あなたの“小さな”物語 vol.21 を読んで

愛知県春日井市の郊外。野々山さんが約二十三年通う馬房<sup>ばぼう</sup>がある。げんき牧場だ。馬と人の交流を通して、心が通い合う、より良い社会を作ることを目指している。ホースセラピーと呼ばれるその基本は、馬とともに時を過ごすこと。野々山さんは毎週二度、欠かさず馬の餌

—— 記憶を遡ると。何歳からのことを覚えていようだろうか。確かな音と匂いを一緒に思い出す最初の記憶は、幼稚園の通園馬車だ。昭和三十六年。入園した福島県郡山市のちばな幼稚園の送迎は馬車だった。馬は園庭で飼われていて人気者だった。——

こんな冒頭から始まる野々山幸江さんの作品を、「あなたの“小さな物語” vol.21」という小さな本に収録した。タイトルは「始まりは通園馬車」。

#### 野々山幸江さんと馬

作者のいる風景 01

12 インフォメーション

11 書き続けている人 01  
加藤有さん(愛知県在住 65歳)

7 おしゃべりの時間  
古橋敬一さん(ライルドワーカ)  
× 山川愛(かすがい市民文化財団)

聞いてもついでに書き残す

6 本屋さんからの感想文  
黒田杏子さん(ON READING)  
池田望未さん(古本屋かえりみち)

3 作者のいる風景 01  
野々山幸江さんと馬

目次



あなたの“小さな”物語 vol.21  
詳しくはP12へ

お散歩中のロン。山歩き帰りの方から声をかけられた。  
馬の話をつっかかりに、いろんな話を野々山さんから伺った。  
またどこかで記したいと思う



ブッチは、かつて上げ馬神事にたずさわっていたそう

やりに通っている。「私にとって、こ  
こは癒しなんです」  
野々山さんに取材を申し込んだ  
理由は、「小さな物語」の審査会に  
端を発する。「今、六十五歳の方が  
馬車に乗って通園していたなんて」  
生温かくておらかな時代の匂いが  
する「始まりは通園馬車」は、優  
しい文体に包まれ、審査会に出席  
した全員の心を掴んでしまった。そ  
してタイトルの「始まりは」にはじ  
まるように、野々山さんは今なお  
馬に関わっていると書かれていた。  
その後、野々山さんに作品収録  
をお知らせし、編集作業に取り掛  
かった。進めば進むほど野々山さ  
んの見てきた／見ている風景が気  
になった、というわけだ。  
「もともと私がげんき牧場を知っ  
たのは、子どもを連れてここに  
散歩してきたからなんです。昔は春  
になると一面のレンゲ畑があって、  
それを見せたくて来たら、馬がい  
た。それで思わず」声をかけたのが、  
馬主の加藤さんだった。



馬房を掃除する加藤さん。丁寧に糞をとる



右からサン、ラック。二頭とも二十歳くらい

「この人ね、一番最初に来た人なん  
だ、なんかひよこひよこと来てさ。  
馬の世話できますか？つて。僕は  
ね、第一印象、たくましい人に見え  
た。こんな優しい華奢な人じゃあな  
かった(笑)。あ、こっちが頼りたい  
ですっつていう雰囲気があつてね」  
「加藤さんは最初の馬のプリンス  
を連れて来ていて、まだその頃は  
柵を作っていましたね。一人で穴を  
掘つてね」  
当時の話をお二人から聴いてい  
ると「懐かしいなあ」と野々山  
さんが思わずつぶやいた。春の気  
配と馬の体温を感じる穏やかな時  
間が、そこにはあった。  
**野々山幸江さんの作品は、  
ここで読めます。**  
① あなたの「小さな物語」わたしのよ  
りみちかえりみち」収録  
『始まりは通園馬車』※当時の馬車  
の写真も掲載しています。  
② 第20回掌編自分史作品集「はじめ  
まして」収録  
『星を眺めませんか』  
③ 第24回作品集「道すがら」収録  
かすがいエッセイクラブ発行  
『牧場「LOVE」』



ゆっくり声をかけ、撫でる



レタスを手のひらにのせると、上手に食べてくれる



# おしゃべりの時間

## 交流会の後のおはなし



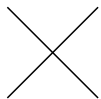
「あなたの“小さな”物語 vol.21」に掲載された  
作者たちとおしゃべりする交流会を、2024年3月30日に開催。  
会を司会進行してくれた古橋敬一さんと事業担当の山川が、  
交流会を振り返りながら、いろんな話をしました。(同日収録)

### 山川 愛

かすがい市民文化財団プロデューサー。アートマネジメントの領域で活動後、2005年に同財団に入社、展覧会や演劇公演の広報や企画、総務などを兼任。2022年より自分史を始めとした市民との協業事業を担当。

### 古橋 敬一

フィールドワーカー。学生時代から社会貢献活動にプロジェクトベースで従事、2008年より名古屋市の港まちづくり協議会事務局次長。2022年より大学教員として新境地に挑む。人と社会とその関係に関心がある。



### 偶然のつながり

**古橋** 交流会の日の朝、いくつかに読まなきゃと思ったら、全部一気に読んじゃった。

**山川** どういう順番で読みました？

**古橋** 最初に掲載されている安藤知明さん(81歳)の作品「岐れ道」を読んで、こんなに文章が上手いんだって驚いて、止まらなくなっちゃって、掲載順が良いですね。

**山川** 何も編集してなくて、ただの年齢順なんです。

**古橋** 『東京の生活史』を監修した岸政彦さんが、電車で横に座ったぐらいの偶然なのに、みんなの物語が繋がっていくように感じる、というニュアンスのお話をされて、この本からもそんな偶然と必然が同居する感じを受けました。

**山川** 最後に収録した「一日のこぼろび」は、内堀塔子さん(10歳)のアイスクリームのお話なんですけど、最初の安藤さんに戻ると牛乳の話になるんです。

## 内堀塔子さん(10歳)



ON READING  
黒田杏子さんの  
好きなお話

「一日のこぼろび」としてアイスクリームをほおぼるときの幸せ、わかるわかる！と飛び跳ねたくなりました。私も十歳の頃、嫌々通っていたスイミングスクールの後に、たまたま雪見だいふくを買ってもらえる時がありました。疲れた体に広がるアイスクリームの甘味。あの満ち足りた気持ちは今でも思い出せます。苦手な算数でよい点数をとれた後ならば、より一層美味しいはず。私が一番好きなのは「スプーンは取らない」というところ。なんかちょっとカッコ

いい。内堀さんは自動販売機からアイスと一緒に出てくるスプーンはあえて取らず、家の「白いたなの引き出し」にある「先が少しとんがったスプーン」でアイスクリーラムを食べます。お気に入りなのではないでしょうか。こういうこだわりはその人らしさが感じられます。

日常のなかの、すこしだけ特別な一日のこと。お母さんと帰り道で見上げた月の美しさはきっと、アイスクリームの美味しさと共にいつかまた思い出してほしい。

ON READING  
〒464-0807  
名古屋市千種区東山通5-19  
カメダビル2A & 2B

## 進藤拓さん(44歳)



古本屋かえりみち  
池田望未さんの  
好きなお話

### 「よりみちが育んだ友情」

「運動音痴で勉強の出来ない」子どもだったという進藤さん(たつくん)と、体が大きいクラスの人気者が「かっちゃん」。ふたりの距離は、骨折で入院していたかっちゃんに、小学校帰りのたつくんが届けものをした日々に、ぐっと縮まる。病室でのおしゃべりの記憶は、周囲の価値観や評価をはなれ、それぞれの身体の内面で根づいていく。

そんな彼らの友情が深いことを感じさせるのは、かっちゃんがみんなにとっての「普通」からこぼれ落ちてしまったときだ。みんながかっちゃんに向ける視線に同調せず、自分の内で培った気持ちを守る進藤さんの姿は、「ともだち」とは何かをまっすぐに問うているようだ。遊びの友達でも部活の仲間でもない、なんとも形容しがたいたつくんとかっちゃんの友情はふたりだけのもので、なんだかまぶしい。でも、まぶしいままでふたりだけのものだからこそ、ともだちで在りつづけるため、だれかを尊ぶために大切な姿勢がここに詰まっている。

古本屋かえりみち  
〒486-0929  
春日井市旭町1-11 TANEYA2階  
→2024年6月30日(日)まで。  
9月下旬より犬山市にて新店舗  
開店予定。

**古橋** あ、本当だ！

**山川** 書いている時代は全く違うんだけど、お隣同士のようにすよね。

**古橋** 交流会では自作を朗読してもらったんですが、塔子さん、うまくいったですね。声がいい。聞いている人たちの顔も、めちゃくちゃ良かった。

**山川** さらに風景が見えてくるようでした。等身大で気取ってないし、目線や息遣いも聞こえてきた。

**古橋** 「アイスを大きな口の中に入れた」で文章が終わるなんて、そんなことできる？ 僕なんか、そこからの話しか書けないかもしれない。

**文章が上手い、それだけじゃない何かあって？**

**山川** 今日の交流会では、掲載した十四篇のうち九名の方にお目にかかり、楽しくおしゃべりしました。今回は全部で百二十一篇の応募作品があり、百二十一篇の人生に出会っちゃったわけです。そこから作品を選ぶのって、本当に難しい。自分史だから優秀は無いわけです。



交流会の最後に、パジャリ(写っていない2名の方、ごめんなさい)

ることは、もう一人の私自身がそれをわかったためでもあります。同時に他の人にも伝わるものになるんだと思います。

何を基準に選ぶかは難しいけれど、一つは深さで、この話は他の人にも読んでほしいと思うから選ばれるんじゃないですか。よく書いていても他人には伝わらないかも、というものもあるし。基準や正解を設けない方がいい気がする。毎回居合わせた審査員が、その人たちにも背景や経験があつて席に座るんだけど、話し合つて決めることで良いんじゃないかな。ただ作品に対して思ったことを言葉にして、みんなで会つてシェアすることが大事だと思う。今日の交流会も交換し合つたら新しい考え方が生まれた、それを持ち帰れたとか。文章が上手いだけで会つても、あそこまで盛り上がりませんよ。共有できるものがあつたという証拠です。

夜勤帰りに駆けつけてくださった進藤拓さん。彼の「よりみちが育んだ友情」という作品、好きですね。「書かないと筆が錆びる」って言う

て、武士みたいで面白い。  
山川 日常のふとしたことも含めて、時間を大切に過ごしているんだって感じる文章。

古橋 あくまでも、社会のためではないんですよ。自分の人生を良い意味でポジティブに捉えようと向き合つた時、それが社会と接続していくという順番が僕は好きで。メッセージを書いてやろうとか、そういうわけじゃない。

山川 自分を自分で眺めてる感じがします。にもかかわらず、読む側は違う視線をもらえる。塔子さんの文章を読んでから、駅のアイスクリームの自販機ばかり見つけています、私(笑)。

### 自分を支えるための表現

古橋 この表現に触れられてよかったと思えるものがいくつもありました。そこに問いを立てているのはいですよ。  
村田奈穂さんの作品「気がつ

ば夢の方へ進んでいた」の話をしたじゃないですか。「子どもの頃から、なぜか「文字」や「言葉」というものに惹かれていた」という一文で始まる物語。何故かわかんないけど好き。それが実は、未来を探る鍵だったことに自分が気が付いていく。

さもありなんみたいな顔で教えてくれる人はいっぱいいるけど、行き詰っている時代の中で鍵を見つめる必要があるなら、問いを立てなくちゃ。人生は謎に溢れていますから。思考は言葉なので、自分の言葉を磨いていく作業は大切だし、磨いている人の文章を読んでいくと気付くことがある。今日集まった人の中にも、これと思った言葉を書き留めて閉まつておいて、何かの拍子に使うんだという方がいましたよね。そうやって人生をより良く育もうとする人が集まると、社会が良き方向に向かうんじゃないかな。

どうしても施策とか仕組みの側から変えていこうとするけど、そうじゃなくて、一人一人が自分と一生懸命向き合つて書いてみる。どう？

と一緒にとっておきのアルバムを作るワークショップを行ったり。

古橋 浅田さんのアルバム作りは、書くことに真っ直ぐに向き合わなくても、表現という括りの中で、みなさんとたくさん思い出を喋りましたね。参加した方の一人が、ご家族の遺品であるカメラやスライド機を「見せたい・貰ってほしい」とわざわざ届けにきてくださったじゃないですか。処分する他なく使えない道のない遺品が、子どもたちや文化背景の異なる他者を喜ばせる。



作品を朗読する、尊い時間

つて読んでもらう。地味な作業だけど、それだつて社会を良くする一つの実践だと思う。美しい文章を書くことも大事ですが、もう少し切羽詰まった塊を丸ごと表現することがとても重要な気がします。良い問いが立てば、良いディスカッションが始まる。そのためにも、まずは小さな物語を集めていくことが大事。  
山川 今までは一方的に受け取るだけだつたけど、もう一度シェアすることで、問いが生まれていくとい

古橋 今日みたいに、塔子さんの朗読を聞いて大人がぼそぼそ話すだけでもいいし。進藤さんの作品がラジオドラマくらい長かつたというスピントフも聞けたし。小さな発見が次につながると思います。  
山川 この冊子に「小さな物語からはじまる長いおはなし」というタイトルをつけたのは、まだまだ始まるなっていう兆しを感じたからなんです。  
吉川 玖音さんが交流会で「雉鳩の風切羽」という物語を書いた動機を話してくれました。浪人時代、勉強しているだけでは精神が持たなくてアウトプットが必要だった、先が見えなくて、過去を思い返す時間が何度もあつた、と。一人で居る時の自分との向き合い方を、玖音さんは自ら選んでいて。十九歳でそんな選択ができるんだ、凄いいと思います。  
古橋 受験生だから勉強しなくちゃいけない。それはちゃんとわかってるんだけど、それだけじゃない自分がある。そのために書くという表現を選んだのは粹ですね。

### みんなで人生の「コマ」を作る

山川 実は古橋さんには、二〇二三年の十月から「孤独・孤立対策活動基盤整備モデル調査」という事業の中で、劇場等文化施設を活用したプラットフォームがどう作れるか？という問いに答えるため、伴走支援をしていただきました。その中でもの書き・インタビュアーの尹雄大さんと一緒にみなさんのモヤモヤを聞いたり、写真家の浅田政志さん



2023年12月23日に実施した浅田政志さんのワークショップ「あなただけの」とっておきの「アルバムをつくらう」



Life Stories Projectは、浅田政志さんと春日井で開催した写真展に起因する。2022年11-12月に開催。

文化施設が交流拠点となるためのヒントが隠されているように思いました。

**山川** そんな現象も含めLife Stories Projectかなと思って。一人の物語ではなく複数形だ。

**古橋** 尹さんと行ったモヤモヤでは、ある参加者が、話してみたいところを聞いてもらえて楽しかったと言っていました。問題が解決するわけじゃないけど、みんなで考えたり、そこからまた別の話が始まったりする場って貴重です。尹さんが「ここは

安全で安心な場所だから、何を話しても気にしなくていい」と言ってくれたから、ホッとしたのかも。一つの物語から始まる第二章がどんな風になっていくか、みんなで見ていければいいですね。

### 物語が輝きだすと

**山川** 書くために体験するのか、体験してオツと思うから書くのか、その順番がじれったいと思う時があります。この冊子に、馬という風景を掲載した野々山幸江さんに「何故書くんですか？」と伺ったら「足が悪くなってきて」と答えられて、ハッとしました。

**古橋** 思わず書いてしまう文章の尊さって、ありますよね。

**山川** 東北の民俗学者の方が、漁師さんの話をどうにか留めようとしていたら、結局漁師になってしまったという話を聞いて。印象深かった。**古橋** 書くというのは、自分の中

でもありませんよね。今は物質的には豊かと呼ばれる時代なのかもしれない。でも僕なんかは、日本が貧しかった時代というか、あのヒリヒリした時代への憧れもあったりする。うまく言葉にならないんですけど、世代なり時代なりに、表現していくことを諦めなくていいと思

小さな物語を集めて社会に開いていく手法は、昔からあることで特別ではない。寧ろ淡々とやっていけばいい。そのフレーズをどう開いていくかが大切だと思います。それが開かれれば、一つ一つの物語が勝手に輝きだすから。

**山川** そういえば、尹さんの最新作『句点。に気をつける』にこんなことが書かれていました。(引用177ページ、光文社、2024年)

——生きているとは言葉に詰まることなんだと思う。美しさに打たれそれについて何か言いたい気持ちがある。でも何を言いたいかはわからない。つまり絶句するところから僕らの暮らしは始まっているというわけだ。そうであれば、その思



2023年12月15日実施 尹雄大さんセッション モヤモヤを聞く

いだけが先行するような急ぐ気持ちのままに話し出すしかないのだと思う。——

**古橋** 今時の若者はとか、こんな時代なんて、とか言いたくなりませんが、実は一人ひとりをちゃんと見ていけばユニークな感性があるし、ちゃんと考えてるんですよね。今日の交流会は大人が子どもに「すごい、すごい」を連呼して面白かったです。子どもは「そうかなー？」と照れながらも嬉しい。結構フラットな学び合いの場になっていました。これが、コミュニティが成熟していくことなんだと思います。

「病の話は、今、通っている名古屋のエッセイクラブで書きました。なので既に発散済なんです」。

加藤さんは過去に二回、躁うつ病を患った。その時期を「よりみち」と題して一本の文章を書いた。「四年間を棒にふる」という意味での寄り道と、病気がなったことでダンスという道と出合うことができたという寄り道だと思っただけです

「一回目は二十代前半、バッテリーが切れ外に出れなかった。でも春になると嘘のように治る。数年繰り返し返していたんですが、これはまずいと家の結露した窓ガラスに「ディスプレイデザイナーになる」と書いていたのを覚えています」

目標ができたことで回復していった。そしてデザイン事務所に就職。

「所長は一回り上の男性で、二人だけの小さな事務所。遠慮してました。やりたことがあるのに抑えている。原因は、小さい時に父が亡くなっているのが、年配の男性との距離感がわからなかったこと。父性原理に出合えていない僕自身の問題なんですけどね」

「父は十六の時に亡くなりました。仲が悪かったわけではないんですが、会話が無い。五十二の時の子どもで、定年二年前

あなたの“小さな”物語をもとに、もう一度インタビュー

## 書き続けている人



### 01

加藤 有さん(ペンネーム)  
愛知県在住、65歳



[写真右から] 1969年11歳、父と私。距離感の相違に、思春期の私と父の関係が窺えます。/1990年32歳、デザイナー時代。ひたすら机に向き合っていた。/2014年頃、56歳。競技ダンス本番。

にリタイアしていたので、活動的な父を見ない。時代的にも畏怖すべき対象なので、物事の本質に立ち入ってないというか。思春期の少年にとってはリアルじゃなかった。明治四十年生まれ、詩人の中原中也と同年代です」

「二回目は躁から始まりました。元気がいいので病気だと認識できない。そうすると散財します。私の場合、財布の紐は固いの、自分でデザイン事務所を起こした。やりたいと思っていないのに、気が大きくなってるんです。鬱に転換すると日常行為ができないので、這うように打合せに向う。薬にもすがる気持ちでありとあらゆる治療法に手をつけた末、知人の紹介で行った野口整体に救われました」

そこからの回復を加藤さんは「肉体の反乱」だと言う。「机に向き合ってたけどと図面を書く仕事から、フィジカルな仕事に自分を向かわせました。第一の職業は自分の意思、第二の職業は身体の要求に応じただけ」ダンスが生業になった。「他人の身体が透けて見えるようになりました。唯一見えないのが自分の身体。でも、文章を書く自分を照らすことができる。書くことで発散できるし、何よりも読んで人に聞いてもらうのがいいんです」



芳賀倫子さん

対面

相談受付中

### 自分史相談

「自分史を書くにはどうしたらいいか」など、自分史についてのご相談に一对一で応じています。

●自分史相談員：芳賀倫子／シナリオライターとしてテレビ・ラジオ各局の番組構成や脚本執筆。またNHK文化センター「シナリオ講座」「エッセイ&自分史講座」を始め各地で文章講座の講師を務める。日本放送作家協会会員。

※相談は要事前予約です。ご来館前にお電話ください。

※2024年4～9月は、毎週火曜日。相談時間は、13:00～、14:00～、15:00～、16:00～で、各45分間です。



様々な取り組みは、日々アップデートされています。かすがい市民文化財団のHPや各種SNSをチェックしてください！



モヤモヤのあいだ

対面

2024.6月頃～開催予定！

### モヤモヤを話す、聞く

あなたのモヤモヤを話したり、他人のモヤモヤを聞いてみませんか。知らない誰かと話をしながら、現在を生きる「わたし」を見てみましょう。

2023年12月に『モヤモヤの正体わたしと身体のつながりを知る』、2024年3月に『モヤモヤとモヤモヤのあいだ』を開催。

「それぞれの、まとまらない話を聞けたのが良かった」「自由に話せる空間と、話したい内容を心地よく話せた」という参加者の声を受け、複数人によるお話を続けていきます。



そのモヤモヤを晴らすヒントになる本。尹雄大さんの選書はコチラから(PDFが開きます)



尹雄大さん

古橋敬一さん

オンライン

2024.5月頃～START！

### ポッドキャスト そしておしゃべりは続く

たわいもないこと、思ったままのことを、なんとなくおしゃべりしながら、リスナーのみなさんとシェアできる番組を配信していきます。

メインは、1,500人にのぼる識者へのインタビューや、400人近い市井の人たちへのセッションを行ってきた、もの書き・インタビュアーの尹雄大さん。そして、まちづくりを軸に、場の関係性を深める実践として聞き書きを行ってきた、フィールドワーカーの古橋敬一さん。このお二人とLife Stories Project担当の山川でお届け。たまにはゲストもお迎えするかも。メッセージ、お待ちしております！

#### ●自分史とは

歴史家の故・色川大吉氏（一九二五～二〇二二）が「無名の庶民、無名の個人が昭和という歴史の中でどのように生きてきたか」という趣旨でまとめた『ある昭和史―自分史の試み（一九七五～一九七九）』で体系化された用語。自叙伝とは異なり「一般市民」に焦点をあてたことで、世間に知られるようになった。なお、生活綴方やふだん記をはじめとした庶民による文章運動は、国内外で脈々と行われてきたと言われている。

#### ●春日井市と自分史

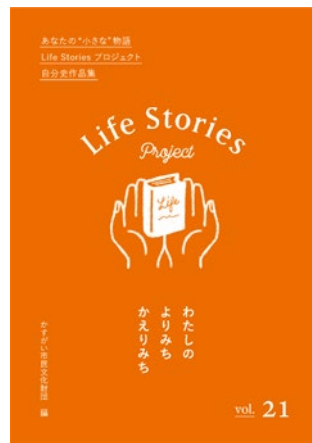
一九九九年、愛知県春日井市は新しい文化施設をオープンするにあたって「市民が主体となった文化芸術活動」を推進しようと、自治体として初の「日本自分史センター」を開設。かすがい市民文化財団が運営する当センターには、全国から約八千冊の自分史が集まっている。また二〇二四年からLife Stories Projectとして、書くだけではない自分史の可能性を探り、さまざまな事業展開を行っている。

## Life Stories Projectの様々な取り組みをご紹介します

### あなたの“小さな物語” 作品募集

年に一回のペースで、みなさんの小さな物語を募集します。テーマに沿ったお話を、400字以上2800字以内で表現。2025年 vol.22のテーマは「待つ」。6/15(日)から募集を開始し、10/15(火)必着です。

「あなた」自身の小さな物語も、聞かせてください。どんな人にも、内なる人生があり、面白くて楽しい、悲しくてやり切れない、そんなお話があるのですから。  
（「わたしのよりみちかえりみち」あとがきより抜粋）



あなたの“小さな物語”  
「わたしのよりみちかえりみち」vol.21  
その人だけの時代が、その人だけの景色がみえる、プライベートな物語。

全国から集まった121篇の自分史作品の中から、10歳～81歳までの14篇を収録。500円(税込み)／96頁／A6無線綴じ  
2024年3月発行



作者たちの交流会の様子

#### 取扱い (2024年4月時点)

- ① 文化フォーラム春日井2F・チケットカウンター
- ② 古本屋かえりみち @kaerimichi.furuhon
- ③ ON READING @on\_reading
- ④ 日々詩書肆室 @andcompany2022
- ④ かすがい市民文化財団 SOTRES kasugai-bunka.stores.jp

#### 【目次】

- 1 岐れ道
  - 2 あとしばらく頑張ろうね
  - 3 治療拒否！
  - 4 あんな日もそんな日も
  - 5 明かりを探す
  - 6 レンコン畑の中の学校
  - 7 始まりは通園馬車
  - 8 人生のスパイス
  - 9 よりみちが育んだ友情
  - 10 気がつけば夢の方へ進んでいた
  - 11 帰路のミルフィーユ
  - 12 雉鳩の風切羽
  - 13 ひとり、写真撮影会
  - 14 一日のごほうび
- |      |            |
|------|------------|
| 大阪府  | 安藤知明(81歳)  |
| 香川県  | 中村千代子(77歳) |
| 愛知県  | 望月ひろこ(71歳) |
| 岐阜県  | 田代匡子(70歳)  |
| 兵庫県  | 里まりこ(69歳)  |
| 愛知県  | 望月まり子(68歳) |
| 岐阜県  | 吉川玖音(19歳)  |
| 愛知県  | 田口萌流(15歳)  |
| 岐阜県  | 内堀塔子(10歳)  |
| 三重県  | 村田奈穂(37歳)  |
| 神奈川県 | 翠尾香華(19歳)  |
| 愛知県  | 野々山幸江(65歳) |
| 群馬県  | 木下美樹枝(47歳) |
| 愛知県  | 進藤拓(44歳)   |

### 春日井市内の 自分史サークル活動

市民が主体となって活動している  
6サークル。

- ・かすがいエッセイクラブ
- ・まいしゃの会
- ・春日井東部自分史友の会
- ・日曜ペンクラブ
- ・春日井自分史をかこう会
- ・春日井自分史聴き書きの会



かすがいエッセイクラブが  
毎年作成している道すがら



まいしゃの会の月例会

### 各種文章講座

自分史相談員の芳賀倫子さんによる全8回の「エッセイ講座」は、書くだけでなく、書いてきた作品を読みあうのが受講者に好評。2024年度は7月6日(土)より開講(参加者の募集締切は6/20まで)。その他、単発の文章講座なども開催予定。



エッセイ講座



文章講座

### 日本自分史センター 利用案内

全国から寄贈される自分史図書を蔵書。現在の蔵書数は約8千タイトル。※本の貸出をしています。(一人2冊15日間)

[利用案内] 場所 :文化フォーラム春日井2F  
(愛知県春日井市鳥居松町5-44)  
開館時間 :午前9時～午後7時  
休館日 :月曜日(祝休日の場合は翌日)、  
年未年始(12月29日～翌年1月3日)

### お寄せください、あなたの自分史

みなさまに閲覧いただく自分史作品の寄贈を受付。あなたご自身が「これは自分史だ」と思うものを一冊お寄せください。※時折、自費出版の本をお寄せいただく方がいらっしゃいますが、自分史と自費出版は別ものです。



台本を読んで演じてみる、中学生たち



ワークショップ中に、みんなの自分史を聞く

### 体験ワークショップ

### 8時間で作品つくります!「8hours」

一般公募の参加者が、地元のお店のヒアリングやLife Stoiesをもとに、演出家・有門正太郎のアドバイスを受けながら8時間で作品をつくり、公演まで行います!



2024年6月15日(土)・  
16日(日)開催!  
(参加者の募集締切は5/31まで)

### 演劇×自分史 第6弾を始動

2024年9月28日(土)～開催予定。今年の演劇×自分史は、ワンチーム制で出演者を募集します! 具体的には、みなさんの年齢や新しい体験へのワクワク感、意気込みなどをもとに、“束の間”の一つの劇団を作るようなイメージ。経験不問、中学生から100歳まで参加可能。応募は6月半ば頃から行う予定です。スタッフとして参加したい方も同時募集。



第5弾 もうっかい!



第3弾 春よ恋



第4弾 おかしな証



第2弾 旅旅(ふたたび)



第1弾 この場所、自分史

## 演劇×自分史

物語や人物を演じる「演劇」と、自身の人生を見つめ直す「自分史」のコラボレーション企画。市民からさまざまなエピソード(自分史)を聞き取りそれをもとにプロの演出家が一つの台本を創作。市民参加による上演スタイルが特徴的。

- 第1弾「この場所、自分史」2018年
- 第2弾「旅旅(ふたたび)」2019年
- 第3弾「春よ恋(未上演)」2020年
- 第4弾「おかしな証」2023年
- 第5弾「もうっかい!」2024年

### ●市民からの声

- 第6弾「もうっかい!」アンケートより  
〔出演者〕
- ・なかなか話せない大人の方や、他の学校の子達と話せたり、みんなの人生であったことを聞けたり、とても良い経験ができて、かけがえのない時間になって、びっくりしました。(中2)
- ・様々な背景を持つ人を話術で? パワーで? 形作っていく過程がすばらしいと思います。(60代)〔観客〕
- ・人生の出来事を、一人ではなく多くの人とバラバラに話すの、とてもいいですね。意味があるのかなのか、分からないことを聞いてもらって、それを複数人で、しかも表現として聞くことに可能性を感じました。
- ・フレッシュオブフレッシュと、大人の魅力のコントラスト。自分たちを解放してる姿がサイコーでした。ありがとうございます。



### 「おかしな証」 演劇×自分史 第4弾 上演台本アーカイブ発売中!

ひとがヒトである アカシのハナシ  
800円(税込み)/70頁/四六判並製  
2023年4月発刊



撮影:浅田政志

〔講師〕有門正太郎  
俳優・演出家・劇作家/1975年生まれ、福岡県北九州市出身。俳優として様々な全国ツアー公演に参加する傍ら、2005年より「有門正太郎プレゼンツ」を開始。作・演出も務め、全国でワークショップ活動も行う。



春日井市で自分史事業が立ち上がってから二十年以上が経つ。それぞれの時期に、担当となったスタッフがその在り方を模索してきた。しかし、人が変われば様相も変わる。時代のアップデートも激しい。私が担当になって二年が経つ。まずは文章を読んで、会いたいと思った人、気になる人に話を聞いてみることにした。

そして実感したのは、「小さな物語」という共通項があるからこそ、その先の景色を眺めることができるということ。その人の個人的な経験をシェアすることで、必要以上に社会とつながったりもするという。閉じておくべきものと開くべきもの、それを行ったり来たりしながら、このドキュメントブックを作った。隣の誰かに読んでもらうだけで、うん、って思える。その時代の感覚も大切にしたいと思った。

一つの物語は次の物語を連れてくる。書くことは、その瞬間の刹那から離れていくようにも思う。だけど、定着することで、時代を伝えていきたい。

山川 愛(かすがい市民文化財団)

小さな物語からはじまる長いおはなし

あなたの“小さな”物語  
Life Storiesプロジェクト  
ドキュメントブック 2024

発行日 | 2024年4月  
編集・テキスト | 山川 愛(かすがい市民文化財団)  
写真 | 小島邦康(表紙、2~5P)  
デザイン・イラスト | 小島邦康(artical inc.)

[発行]  
公益財団法人かすがい市民文化財団  
486-0844 愛知県春日井市鳥居松町5-44  
電話 | 0568-85-6868  
ホームページ | [www.kasugai-bunka.jp](http://www.kasugai-bunka.jp)

下記SNSでも情報を発信しています。  
ホームページTOPからアクセス!



note



ご感想は  
こちら



公式 HP

公益財団法人  
**かすがい市民文化財団**  
KASUGAI CIVIC CULTURAL FOUNDATION